

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	色彩感情の研究
Author(s)	木村, 俊夫
Citation	茨城大学工学部研究集報(2(1)): 114-116
Issue Date	1949-09
URL	http://hdl.handle.net/10109/7417
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

色彩感情の研究

Inquiries into Colour Feeling

木村俊夫 (Toshio Kimura)

ABSTRACT — Once Francis Galton took up this problem as "colour association", but recently most psychologists look upon this theme as "colour synaesthesia" or "colour feeling". In my inquiries, I take the latter view point and investigate psychical combinations of the four seasons, the four directions, five vowels, some emotions and colours. The results of these inquiries show us some definite inclinations that are hidden in the human nature.

1. 問題の性質

Francis Galtonの *Inquiries into Human Faculty* のうちの *Colour Association* なる章を見ると、数の観念や暦月や音声等が色と結合して、殆ど同時に感ぜられるという人々の実例が紹介せられてゐる。Galtonはこれらの現象を色彩聯想として取扱つたのであるが、今日では多く、色彩共感覚 *Colour Synaesthesia* 若しくは色彩感情 *Colour Feeling* として取上げて居る。これらの現象を聯想として取扱うべきか、感情として、或いは感覚として考えるべきかは、理論的に根本問題であるが、ここでは立花祐雄氏著「色彩の心理」の立場を採用して感情として取扱ふことにする。立花氏は色彩の持つ感情効果を固有價と表現價と象徴價の三つに分ける。オ一は色の見かけ上の温冷、輕重、明暗等であり（「多實工專研究報告」オ一号の「重量比較に於ける色彩効果」参照）、オ二は色が人に感じさせる尊卑（上品、下品等をも含めて）、適不適（好き、嫌いをも含めて）等である。そしてオ三はGaltonが例示したような問題である。ここではこの最後のものについての研究の二三を紹介したい。

2. 調査の手續

この研究は本年の春、学校附近の新制中学及び高校の男女各学年生徒計737人について質問法に従つて調査した結果に基づくもので、ここでは問題45問のうち若干を季節、方位、母音、情緒等に分類して考察する。

問題は一題毎に答を書きように問を挿んで口頭で提出する。一問一答を原則とし、直感された色だけその名を記させる。理論で割出させないようにする。生徒は出題、例えば「春」という語を聞いて直ぐに感した色の名のみ、例えば「緑」という字を順に記すわけである。生徒の答える色の名称は様々であるから、これは一定の標準に従って予め色名分類の系統表を作成し、之に依って結果を示すことにする。

3. 調査の結果

(a)	色名	回答総数	%													満蒙支の 市風習				
			赤	赤橙	橙	黄橙	黄	黄緑	緑	青緑	青	青紫	紫	赤紫	白	灰	黒	青	春	
(a) 季節の色彩象徴	春	677	18.0				6.3	5.3	57.3		13.0								青	春
	夏	642	18.7				4.7		16.4		24.7	1.2			10.8				朱	夏
	秋	654	15.1		13.3	2.1	43.2		7.8		10.8		1.2		1.1	1.2			紫(白)	秋
	冬	645	1.5		9.3		16.8		1.5		5.1	1.4			4.5	9.9	18.6		玄(黒)	冬
(b) 方位の色彩象徴	北	523	1.7		2.7		1.8		6.2	1.1	7.3	1.1	1.3		57.5	7.8	5.3		玄	武
	東	483	45.0	1.3	6.2		4.8		4.4		48.2				2.5		2.1		青	龍
	南	447	24.5	1.6	6.8		15.6		15.3		25.6				4.7		3.1		朱	鳥
	西	533	25.0		12.0		8.3		24.3		13.5		1.7		1.8	3.2	6.0		白	虎
(c) 母音の色彩象徴	ア	531	72.5		1.9		5.1		1.5		7.5		1.1		3.8		3.8		黒	黄
	イ	394	8.1		5.1		32.7		8.9		9.1		2.0		17.5	2.0	4.5		赤	青紫
	ウ	407	8.9		1.4		6.6	4.7	10.7		17.9	4.7	2.7	4.7	10.7	10.3	13.2		緑	青紫
	エ	355	10.9	1.5	18.5		10.9	1.6	11.8		19.4		2.8		7.3	3.3	12.3		白	緑
(d) 情緒の色彩象徴	嬉しい	570	53.5		2.8		27.3	1.0	5.9		11.9				4.5					
	悲しい	633	2.5		1.4		2.8		1.2		15.1		6.0		6.9	12.8	24.2			
	腹立しい	550	33.2		10.1		2.9		1.4		3.8	1.6	8.2		2.1	5.1	23.5			
	恐しい	607	8.7		3.9		1.0		1.3		9.3		1.9		3.6	4.9	66.2			

以上の表中1%より小さい値は省略した。最右欄は比較参考のため他の文献から持出したもので、上表左上はラムボオの「母音の歌」、右下はGalton

の掲げる例である。表中＝印は才1位，—印は才2位たることを示す。

4. 研究の方向

以上のような結果を学年別、年齢別の表に書変えて見ると多少の相違が見られるが大體動かない。然し外国の諸例と比較すると相当の相違が見られる。それは各民族の歴史性、風土性に限定されることとなるものがあるからであろう。然し(c)や(d)は性質上比較的そういう限度を受けぬ舊のものであるが、これらに関しては未だ外国に大量統計の結果の報告が見えぬから実証するわけにいかない。(a)や(b)は同じ日本でも都会と僻地、海岸地方と山岳地帯で異なりそうである。然し同じ環境におかれた人々の間には、極めて主観的な心理機制に基くものながら大體一定の傾向がある、ということを描してこの稿を終らう。最後にカンジンスキの所謂絶対絵画式の方法で彩管を振って(d)の問題に答えさせた結果1位、2位は前掲の表と大體同様であったことを附記しておく。

(本稿は才七回応用心理学会にて発表したもの、要旨である)。